表１　琉球使節の進京関連年表（咸豊・同治期）

年度	使節名 正副使	那覇発 →福州行	福州着	福州発 →北京行	北京着	北京発 →福州行	福州着	福州発 →那覇行	那覇着	備考
咸２（進） 1852	毛種美 蔡士俊	咸2. 9. 30	咸2. 10. 22 咸2. 10. 23	2. 11. 6	咸3. 1. 18	咸3. 2. 10	咸4. 5	咸4. 5. 末	咸4. 6. 3	請諭使の馬克承ら同行
咸４（進） 1854	向邦棟 毛克進	咸4. 10. 6	咸4. 10. 17	5. 8. 7	咸5. 11. 23	咸6. 1. 10	咸6. 4. 5	咸6. 5. 21	咸6. 9. 27	謝恩使兼任 帰途薩摩漂着
咸６（進） 1856	向有恒 阮宣詔	咸6. 10. 19	咸6. 10. 27	6. 12. 1	咸7. 3. 18	咸7. 5. 21	咸7. 7. 19	咸8. 5. 4	咸8. 5. 16	
咸８（進） 1858	翁俊 阮孝銓	咸8. 10. 8	咸8. 10. 16	9. 3. 6	咸9. 6. 4	咸9. 7. 22	咸9. 10. 18	咸10. 4. 29	咸10. 5. 16	
咸10（進） 1860	向志道 鄭徳潤	咸10. 11. 17	咸11. 3. 10 咸11. 2. 4	—— ——	—— ——	—— ——	—— ——	同1. 6. 21	同1. 9. 8	進京不可 帰途漂着
同１（進） 1862	鄭 向啓元 林長隆		同1. 11. 4	——	——	——	——		同3. 5. 16	賊船遭遇 進京不可
同２（慶） 1863	馬文英 毛克述	同2. 10. 18	同3. 2. 17	3. 8. 25	同3. 11. 30	同4. 2. 1	同4. 5. 17			登極慶賀
同３（進） 1864	東国興 毛発榮	同3. 10. 13	同3. 10. 19	4. 10. 1	同4. 12. 18	同5. 2. 6	同5. 4. 11	同5. 5. 14 同5. 6. 4	同5. 5. 25	請封使兼任
同４（迎） 1865	發 鄭秉衡 鄭	同4. 10. 7	同4. 10. 21	—— ——	—— ——	—— ——	—— ——	同5. 6. 9	同5. 6. 21	接封使
同５（進） 1866	毛文彩 魏掌治		同5. 10. 25		同6. 5. 19	同6. 7. 2		同7. 閏4. 20	同7. 5. 5	謝恩使（御書）
同５（謝） 1866	馬朝棟 阮宣詔	同5. 11. 4	同5. 11. 10	6. 4. 7	同6. 8. 15	同6. 10. 17		同7. 閏4. 16	同7. 5. 5	謝恩使（冊封）
同７（進） 1868	向文光 林世爵	同7. 10. 2	同8. 3. 21	8. 4. 18	同8. 8. 20	同8. 10. 22	同9. 1. 18	同9. 5. 8	同9. 5. 19	往路遭風
同９（進） 1870	楊光裕 蔡呈楨		同9. 10. 22	9. 10. 28	同10. 2. 2	同10. 4. 2		同11. 5. 23	同11. 6. 6	
同11（進） 1872	向徳裕 王兼才	同11. 10. 16	同11. 10. 29	11. 11. 27	同12. 3. 6	同12. 5. 18		同13. 4. 20		
同13（進） 1874	毛精長 蔡呈祚	同13. 9. 13	同13. 9. 28	13. 11. 3	光1. 2. 9	光1. 5. 10				

典拠：『清代中琉関係檔案選編』、『清代中琉関係檔案続編』、『清代中琉関係檔案三編』、『歴代宝案』（台湾大学本）第十四冊・第十五冊、『中山世譜』巻十三、『球陽』巻二二、『琉球王国評定所文書』第八巻、『那覇市史』資料篇第１巻６（久米系家譜）、『那覇市史』資料篇第１巻７（首里系家譜）、『那覇市史』資料篇第１巻９（近世那覇関係資料）、『対外関係史総合年表』（吉川弘文館）、東恩納寛惇『尚泰侯実録』、徐恭生「清代の琉球朝京使節の研究」（『中国福建省・琉球列島交渉史の研究』所収）、頼正雄「清代福建委派官員護送琉球臣赴京考」（『第五届中琉歴史関係学術会議論文集』所収）、深澤秋人「琉球使節の北京滞在期間－清朝との通交期を中心に－」（『沖縄国際大学　総合学術研究紀要』第８巻１号、2004）、『沖縄県史』12巻等参照。

『沖縄県史　各論編４　近世』（2005）より

【表2】　琉球使節の参府（江戸上り）関連年表

西　暦	清国	琉球	日本	関　連　事　項	備　　考
1847	道光27	尚育13	弘化４	9.17　尚育王死去	
1848	道光28	尚泰１	嘉永１	5.8　尚泰王即位	
1850	道光30	尚泰３	嘉永３	6.2　尚泰即位の謝恩使尚慎ら那覇発 7.1　鹿児島着、島津斉興に拝謁、 8.2　鹿児島発、10.30江戸着	琉球、薩摩藩より参府費用として銀800貫目を拝借
1853	咸豊３	尚泰６	嘉永６	7.22　十二代将軍家慶死去、 8.21　薩摩藩、琉球へ56（安政３）年に慶賀使派遣を内達、 11.23　十三代家定襲職	8.21　琉球、薩摩藩より参府費用銀80貫目を拝借
1855	咸豊５	尚泰８	安政２	5.　琉球慶賀使（伊江ら）鹿児島着 5.12　琉球人参府に付諸役任命 11.7　斉彬登城、阿部正弘と琉球人参府を安政５年（1858年）に延期	10.2　江戸大地震発生
1856	咸豊６	尚泰９	安政３	7.23　新納久仰、島津伯耆に琉球人参府の際の同行を命ずる	
1857	咸豊７	尚泰10	安政４	8.15　新納久仰、島津主殿に江戸詰交代及び琉球人参府の際の同行を命ずる	12.　来秋の琉球人参府費用として、幕府より薩摩藩へ金一万両貸与
1858	咸豊８	尚泰11	安政５	1.9　島津久福、当秋の琉球人参府に付き諸担当役人を任命する 2.24　島津久福、琉球館へ新規拝借金を認めず、旅費の手当を命ずる 4.7　新納久仰、琉球館に琉球人参府冗費を省くことを命ずる 5.　琉球の慶賀使、鹿児島着。 5.16　幕府、目付岩瀬忠震を琉球人参府用係に任命。 7.11　幕府、国事多端のため島津斉彬に琉球人参府の延期を命令。 7.25　新納久仰、琉球館に琉球人参府の延期を示唆 8.2　国事多端を理由に琉球人に参府期を命ずる 10.25　徳川家茂、将軍襲職	7.6　徳川家定没 7.16　島津斉彬急死 10.26　琉球の上国使者（宜野湾方）、冊封延期を協議
1859	咸豊９	尚泰12	安政６	5.　英国領事オールコック来日（高輪東禅寺）、米国公使ハリス（麻布善福寺） 6.15　国頭王子政秀（忠義家督相続慶賀使）鹿児島着 7.27　国頭王子ら、琉球産鬱金・紅花の琉球館扱いに付薩摩へ要請 8.　仏領事ベルクール来日（三田済海寺）	7.　琉球慶賀使を1862年に派遣計画
1860	咸豊10	尚泰13	万述１	3.　島津忠義、参勤交代のため鹿児島を出発するも、井伊大老暗殺の報を聞き、福岡より引き返し、参勤交代を壬戌（1862）まで延期要請 5.　薩摩藩、壬戌（1862）予定の琉球慶賀使の参府延期要請、幕府、国事多端の理由で延期要請を許可	
1866	同治５	尚泰19	慶応２	1.21　薩長同盟成立。 7.20　将軍家茂、大阪城で没、慶喜の家督相続布告。	6.21　冊封使来琉 8.27　尚泰を琉球国中山王に冊封

典拠：『対外関係史総合年表』（吉川弘文館、1999年）、『新版　日本史年表』（岩波書店、1984年）、『江戸立ニ付仰渡留』（東京大学史料編纂所蔵）、『新納久仰雑譜』ニ（『鹿児島県史料』）、紙屋敦之「琉球使節の最後に関する考察」（『幕藩制国家の琉球支配』、校倉書房、1990年）等参照。

表３　尚泰冊封関連年表

西暦	清国	日本	事　　項
1848	道光28	嘉永1	○尚泰、琉球国王の位を継承(この年、尚泰六歳)
1851	咸豊1	嘉永4	○冊封費用捻出のため、子年(1852)から午年(1858)まで、臨時増税を決定
1853	咸豊3	嘉永6	○冊封費用捻出のため、民間へ献金呼びかけ、小橋川筑登之昭常の妻から、銅銭16万貫文を「奉借」、譜代家譜を賜与
1856	咸豊6	安政3	○琉球当局、庚申年(咸豊10＝1860)の冊封要請を決定する
1858	咸豊8	安政5	○冊封費用として、民間人8名から各々銅銭16万貫文を「奉借」、譜代家譜を賜与 ○10.26在薩摩琉球使者(宜野湾親方)、冊封延期について薩摩当局と協議
1861	咸豊11	文久1	○清国の内憂外患の情報により、琉球当局は各寺社に鎮圧を祈祷 ○冊封の大典を同治3年(1864) へ延期する ○冊封費用として、民間人1名から銅銭16万貫文を「奉借」、譜代家譜を賜与
1863	同治2	文久3	○同治帝登極慶賀のため、慶賀使(馬文英ら)を派遣(翌3年11月北京着)
1864	同治3	元治1	○冊封の大典を寅年(同治5＝1866)に延期する ○冊封費用として、民間人11名から各々銅銭16万貫文を「奉借」、譜代家譜を賜与 ○進貢使兼請封使(東国興ら)を派遣する(10.13那覇出港、10.19福州着、11.1福州当局に請封・進京を要請、11.12軍務喫緊のため進京不可能と返答) ●12.20福建巡撫徐宗幹、琉球請封の件を上奏する
1865	同治4	慶応1	○福州滞留の東国興ら、3.28福建当局を介して冊封内諾を要請するも礼部の返答なし、4.16東国興ら再度冊封内諾を要請するも返答なし ●礼部、閏5.15尚泰冊封の件を上奏、閏5.28琉球冊封の正副使を選抜し引見せしめよとの上諭下る、6.20襲封許可を伝える礼部の咨文、福州到着 ○東国興ら6.21礼部の咨文を受け取り、馬艦船通事に交付して急ぎ帰国させる ●礼部、7.5冊封正副使の趙新・于光甲を皇帝に引見させ、冊封に当たっての諸規定を前例に準じて作成し御覧に上呈 ○福州滞留の東国興ら、進京について六回陳情、10.1福州発、12.18北京着 ○秋、接封大夫(迎接使)の鄭秉衡(真栄里親方)を福州へ派遣
1866	同治5	慶応2	○東国興ら、1.1元旦朝賀の礼へ参加、2.6北京発、4.11福州着、5.25帰国・復命 ○冊封正副使(趙新・于光甲)の一行、4.22福州着、5.13乗船、5.14頭号船座礁・修理のため下船、6.4再乗船、6.9五虎門より出港、6.21那覇港着 ●冊封使の趙新ら、7.20先王の尚育を諭祭、8.27尚泰冊封の式典 ●冊封使船(冠船)、11.10那覇発、11.16五虎門入り、11.19福州着
1868	同治7	明治1	◎11.21明治改元の太政官令、薩摩藩より琉球王国に到達
1869	同治8	明治2	◎6.17版籍奉還(琉球王国は鹿児島藩の管轄となる)
1871	同治10	明治4	◎7.12鹿児島藩、同藩の琉球管轄の沿革調書を明治政府に提出 ◎7.14廃藩置県(琉球王国は鹿児島県の管轄となる) ※7.29日清修好条規並びに通商章程・海関税則に調印 ○9.　琉球当局、明治新政府の直轄を警戒し、対策を協議、10.15鹿児島の琉球館役人へ従来通り「薩摩の附庸」となることを陳情せしむ ○10.18宮古島民、那覇からの帰途台湾に漂着、殺害さる(琉球人台湾遭難事件)
1872	同治11	明治5	◎1.25鹿児島県の使者(奈良原・伊地知)、琉球当局と会見、弊政改革等を指示 ◎5.30大蔵大輔井上馨、琉球の版籍回収につき建議、外務省も三ヵ条(尚泰冊封を含む)を建議、6.左院も琉球＝日清両属論を建議 ◎6.24鹿児島県の使者、琉球当局に維新慶賀使者の上京命ず ○6.25伊江王子ら維新慶賀使に任命され、7.25那覇発、8.20鹿児島発、9.3東京着 ○9.4琉球当局、日本の台湾出兵を取り止めるよう要請する陳情書を提出 ◎9.14明治政府、尚泰を冊封(琉球藩王とし、華族に列する) ◎9.15副島外務卿、「藩属ノ体制ニ付建議」(日本専属の体制徹底のため外務省官員を琉球に常駐させる等)、9.28琉球の対外条約を外務省へ移管
1873	同治12	明治6	◎3.12外務省、東京の琉球藩邸に親方一人の在勤を命ずる(4.12了承の旨回答) ◎4.4在琉球外務省官員、進貢船の出入港等について届け出ることを指示 ○4.14琉球当局、琉球諸島に国旗掲揚せよとの明治政府通達を了承する旨回答 ○5.15日清両属の継続を図るため浦添親方に上京命令(5.30那覇発、7.2東京着) ※5.27柳原前光(特命全権副使)、総理衙門大臣と会談、琉球＝日本専属論を主張 ○7.7浦添親方、上野景範(外務少輔)を訪問、上京請願の趣旨説明、琉球の所属問題が日清間で交渉されていることを知る ○8.11東京在勤の与那原親方(馬兼才)、外務卿副島種臣邸を訪問、日清両属の継続を要請(副島外務卿、琉球藩の国体政体は永久に不変と約束) ◎9.20花房義質(外務大丞)ら那覇着、副島種臣の証言を書面にして琉球藩へ送る
1874	同治13	明治7	◎7.12琉球藩関係事務を外務省から内務省へ移管 ※5.～10.台湾出兵、北京談判、日清互換条款(北京議定書) ○11.30最後の進貢使(国頭盛乗＝毛精長ら)を派遣
1875	光緒1	明治8	◎7.10松田道之(内務大丞)那覇着、7.14進貢使派遣禁止・尚泰上京を通告
1878	光緒4	明治11	◎11.松田、伊藤博文に「琉球藩処分案」を提出、処分の理由を列挙

典拠:『文宗実録』、『穆宗実録』、『中山世譜』巻四、『球陽』巻二二、『尚泰侯実録』、『明治文化資料叢書』第四巻外交編（『琉球処分』）、『清代中琉関係檔案選編』、『清代中琉関係檔案続編』、『清代中琉関係檔案三編』、『清代中琉関係檔案五編』、『那覇市史』資料篇第１巻６（久米系家譜）、『那覇市史』資料篇第２巻中ノ４、『対外関係史総合年表』（吉川弘文館）等。

なお、事項中の○印は琉球の内政関係、●印は中琉関係、◎印は日琉（薩琉）関係、※印は日清関係の項目を示す。

『沖縄県史　各論編４　近世』（2005）より

表４　異国船（欧米艦船）の琉球来航略年表

1832年8月	アマースト号（船長リンゼイ、通訳官ギュツラフ）来航、 一週間滞在、戦略的価値／貿易の可能性等調査
1840年8月	インディアン・オーク号（ボーマン船長、乗組員67名）、 アヘン戦争参戦の途中台風に遭遇して漂流、沖縄本島北谷沖で座礁／沈没、乗組員全員救助され、浙江省舟山の英軍基地へ送還
1842年4月～5月	アヘン戦争参加の英国船、琉球各地に寄港、牛／山 羊／鶏／野菜などの生鮮食料を要求／掠奪
1843年～45年	サマラン号（英国戦艦、ベルチャー艦長）、 アヘン戦争終了後、琉球列島の各地を調査／測量
1844年4月	アルクメーヌ号（仏国艦船、デュプラン艦長）来航、 フランス人のカトリック宣教師フォルカード、上陸／長期滞在
1846年4月	スターリング号（英国商船、マックチェイン船長）来航、 英国籍の宣教師兼医師ベッテルハイム（伯徳令）一家、上陸／長期滞在
1846年５月	サビーヌ号（仏国艦船、ゲラン船長）来航、 フォルカードの後任として宣教師ルチュルデュ（伯多禄）上陸
1846年６月	クレオパートル号（仏国艦船、セシーユ提督）等二隻来航（那覇→運天）、開港／条約締結要求
1849年12月	パイロット号（英国艦船、ライオンズ提督）、 パーマストン書簡携帯／提出
1852年2月	スフィンクス号（英国船、シャドウエル船長）、 パーマストン書簡携帯／提出、首里城強行入城
1852年月4月	ロバート・バウン号（米国籍苦力貿易船、ブレイソン船長）、 乗船の苦力反乱により奪取され台湾へ→途次、石垣島崎枝村沖で座礁→苦力380名上陸／長期滞在（船上の20名は船員により厦門へ連行／裁判→英米艦船の襲来／捕縛作戦）→琉球側の苦力護送計画→福建へ護送船派遣→途中、海賊の襲撃
1853年～54年7月	ペリー、サスケハナ号（米国の日本開国遠征艦隊旗艦）等四隻、 日本遠征の前進拠点化、日米和親条約、琉米修好条約締結。
1854年２月	ロビーナ号（イギリス船）、ベッテルハイムの後任として宣教師モートン来琉
1855年月2月	リヨン号（仏国艦隊、ゲラン提督）、琉仏条約締結。 フランス人のカトリック宣教師、ジラール（1858年10月まで琉球に滞在）・フュレ（1862年10月まで）・メルメ（1856年10月まで）来琉。
1859年７月	オランダ使節ファン・カペレン、琉蘭条約締結